

## 〈故郷〉から遠く離れて

——『グレート・ギャツビー』における血縁、  
友愛、アメリカの〈個人〉<sup>1</sup>

中野学而

### はじめに——「最高のアメリカ小説」?

『グレート・ギャツビー』（以下『ギャツビー』と省略する）という小説において主題的に最も衝撃的な場面はどれかと問われれば、私にとってそれは、ブキャナン邸で久々にデイジーやトムと再会を果たした帰り道のニックが初めて「隣人」ギャツビーの姿を認めるあの鮮烈な初夏の夜のシーンでも、あるいはすべてに絶望したギャツビーがプールの水面に浮かんだまま色を失ったようなこの世界のグロテスクな事象に取り囲まれつつウィルソンの手によって射殺されるあの初秋のシーンでもなく、はたまたトムが運転しているものと見誤ることによってマートルがデイジーの運転するギャツビーの車に駆け寄ってはねられ、片方の乳房をもぎ取られてそのおびただしい血を道端の埃に混ぜ合わせることになる、通常この小説中間違いなく最もドラマティックだと考えられようあの夏の終わりの場面でもさえない。それは何より、ギャツビーがウィルソンによって殺されたのち、シカゴの新聞に出た死亡広告を見て、しがない「ジェームズ・ギャツツ」という若者でしかなかった頃のギャツビーが「捨てた」父親がニックのもとにやってくるあの場面であり、あるいはトムとデイジーとの関係を清算すべく意を決してブキャナン邸に乗り込んで行ったギャツビーが、デイジーの娘パメラの存在を目のあたりにするあのシーンとなる。

この二つは、それだけ取って見てみればむろんまったく衝撃的なものな

どではない。単にギャツビーにも父親がいて、デージーにも娘がいる、ということが言われている場面に過ぎないからである。だが、ひとたびこの『ギャツビー』というアメリカ小説の磁場の中に置かれるや、これら何の変哲もない場面は、一つの世界そのものをその成立の根源から問いなおすに足るほどの衝撃力をもつことになる。それは、この小説が全体として、「親」や「子」つまり〈血縁〉から、あるいは血縁が最もよく象徴する知人や友人、風景や空気そのものを含めた〈故郷〉とでもいうほかのない独特の圏域の総体から自らを〈個人〉として切り離して生きることが人間にどこまでできるのか、という典型的に「アメリカ的」というほかない実験の顛末を描いた小説にほかならないからであり、何よりもその実験が「失敗」するありさまを描くことこそが〈アメリカ〉という現象を真に根源的なかたちで問い直すことにつながるのだ、というフィッツジェラルドの気迫がみなぎる小説だからである。

ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) やマリウス・ビューレー (Marius Bewley) あたりから始まってリチャード・リーハン (Richard Lehan) らにまで至る批評家は、フロンティアの消滅や未曾有の世界大戦の経験を経て金融を中心とする新しい形態の資本主義の時代を迎えた激動の一九二〇年代アメリカが失ってしまったある種の本質的な「アメリカ的な心の状態」とでもいうべきものを身を以て体現する人物こそがギャツビーである、という前提のもとに、その「アメリカ的な心の状態」をフィッツジェラルド自身の言葉をもとに「世界に対する驚きの感覚」と呼び、そのような「ロマンティックなものに対する鋭敏な驚きの感受性」が失われてしまった現代アメリカに対する嘆きこそニックが読者に投げてよこす最大のメッセージであるとしてきた (Trilling 17-9; Bewley 125; Lehan 31-34)。しかし、冷戦構造のなかでアメリカ的「自由、平等、民主主義」のイデオロギーを礼賛することにつながるそのような見解の暗黙の偏向に対して敏感な近年の批評が明らかにしてきたことは、つまりこの小説において批判されているのは決してギャツビーと対比されるものとしての「一九二〇年代の墮落したアメリカ」だけではありえない、ということである。富と権力

とを一極集中させるワスプ社会への「同化」をめざしてワスプ以上に「ワスプ的」になろうとし、それでもそこからどうしても排除される屈辱感を抱えて生きた誇り高き南部のアイリッシュ系カトリック教徒の末裔がフィッツジェラルドであったのなら、作品の精神には当然「アメリカ（ワスプ）精神批判」が横たわっているはずだからである<sup>2</sup>。したがってこの論考は、アメリカン・ドリームの根源にはらまれていた不平等や搾取の問題を抉り出すような近年の種々の見解<sup>3</sup>とも問題意識の一部を共有しつつ、それらの〈死角〉と思われる場所からギャツビーの体現するアメリカン・ドリームを根源的に問い直すようなものとなる。それは、この作品を「これまで書かれた中でおよそ最高のアメリカ小説」（*Letters* 80）とまで言う作者の自信の根拠のひとつを明らかにすることともなるだろう。

## 1. 喪われた〈故郷〉の風景

冒頭の一節は、次のように始まる。

僕がまだ年若く、心に傷を負いやすかったころ、父親がひとつ忠告を与えてくれた。その言葉について僕は、ことあるごとに考えをめぐらせてきた。

「誰かのことを批判したくなるときには、こう考えるようにするんだよ」と父は言った。「世間のすべての人が、お前のように恵まれた条件を与えられたわけではないのだと」（7）

ここにあるのは、まずはこの小説の語り手ニックのスノビズムの表明である。このあと「僕の家は三代にわたって、この中西部の都市ではいささか名前を知られており、暮らしぶりも裕福だった。……言い伝えによればバックルー公爵を祖先にいただいているということだが、一族の実際の礎は、僕の祖父の兄にあたる人物によって築かれた」（8）とも付け加えるニックは、つまりスコットランド／イングランド系の自らの家系がアメリカにおける特権階級、すなわちいわゆる正真正銘の「ワスプ」のそれであ

ることをここで明記していることになる<sup>4</sup>。ウォルター・ベン・マイケルズ (Walter Benn Michaels) 他の論者は、当然ここにこの小説全編にわたる通奏低音としての一九二〇年代アメリカを席卷したネイティヴィズムのにおいを嗅ぎつける<sup>5</sup>。

しかし同時に——これはそのようなニックのネイティヴィスト的姿勢に関する問題ともどこかで呼応しつつ——この小説が、リチャード・チェイス (Richard Chase) の言う「ロマンス」性に傾いた雰囲気を持つこと、あるいはその主題群があからさまに「アメリカ性」を持つことからアメリカを代表する小説、いわゆる「偉大なアメリカの小説」のひとつと呼ばれることが多いものである<sup>6</sup>ことを思えば、父から息子へと手渡された人生訓になら批判的なニュアンスを加えようとしないうこの雰囲気には、いわく言い難い緊張が感じられてもくる。改めて言うまでもなく、もしも時代を超えてアメリカを貫く「アメリカ精神の原型」とでもいうようなものがあるとすれば、それはエマソンの有名な評論にもあるように、さまざまな意味での「父なる権威の否定」、「アメリカのアダム／イヴ」として「自己信頼」と「個人主義」に基づき「過去や故郷のしがらみを捨て去り、ゼロからスタートすること」にこそその核心を持つからである (Tanner 32-3)。

今でも鮮やかに脳裏に残っているのは、クリスマス休暇にプレップ・スクールから、また長じてからは大学から、帰郷するときの思い出だ。シカゴより先に行くものたちは十二月の夕方六時に、薄暗い古びたユニオン・ステーションでひとかたまりになっていた。シカゴに実家のある何人かの旧友たちは、わくわくとしたお祭り気分既に染まっており、さらに先に進む連れに向かって、気ぜわしく別れを告げていた。あちこちの上品な女子寄宿学校から帰郷する女の子たちが身にまとった毛皮のコートのことや、白い雪になって浮かんだおしゃべりのことや、古い知り合いをみつけては高く手を上げて振ったことなんかを覚えている。どこのうちに招かれているかといった情報を僕らは交換し合ったものだ。「オードウェイの家には行く？ ハーシー

の家には？ シュルツの家には？」などと。僕らは細長い緑色の乗車券を、手袋をはめた手に後生大事に握りしめていた。……

……食堂車で夕食をとったあと、歩いて戻ってくるときに、ひやりとした連結部のところで僕はその息吹を深々と胸に吸い込み、自分たちがこの地方に生を享けた人間なのだということを、言葉としてではなく、肌身にひしひしと感ずる。そんなちょっと落ち着かない気持ちが一時間ばかり続くのだが、いったんそれを通り越すと僕らは欲も得もなく、再びすっかり故郷の空気に溶け込んでしまうことになる。  
(166-67)

まさにフィッツジェラルドの美学の最良の表れと言っていると思うが、まずこの小説最後におかれたニックの高校時代／大学時代の帰郷の期待に満ちた風景がこれほど痛切に美しいものとなっているのは、何よりもこれが帰郷そのもののありさまの描写ではなくその「一瞬前」の描写であるからであり、また後に論じるように、それがすでに喪われてしまった過去の追憶でもあるからだ。故郷に実際にたどり着いた時にはすでに消えてしまっている感覚、故郷と異郷とのあいだの「連結部」にある感覚を基調にしつつ、ここで強調されているのはつまり、自分がそれと感じているということを意識することさえないほどの故郷の友人や一族、それらを全て包み込む故郷の風景そのものとの一体感への予感と、結局はそれが直接は描かれないことによる、そしてそれらがすでに喪われた過去のものであるからこそ鋭く感じざるを得ない、そこからの決定的な疎隔感である。ここにいる〈この自分〉は、なぜあのとときの〈あの自分〉からこんなにも遠く引き離されてしまっているのか――

ギャツビーは緑の灯火を信じていた。年を追うごとに我々の前からどんどん遠のいていく、陶酔に満ちた未来を。それはあのととき我々の手からすり抜けていった。でもまだ大丈夫。明日はもっと早く走ろう。両腕をもっと先まで差し出そう。……そうすればある晴れた朝に――

だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも。(171-2)

小説の最後を飾るこの示唆的なパッセージにおいて、ボートは「前へ前へ」と向かいながら、「過去」のほうへと「絶え間なく」「押し戻され」もする、という。「年を追うごとに」「どんどん遠のいていく」のは、通常は「未来」ではなく「過去」のほうだろう。そもそもギャツビーが求めていた「未来」とはデイジーとの「過去」を「やり直す」ことだったのだとすれば、ギャツビーにとっての「未来」と「過去」とは、実はまったく同じものなのではないのか？

## 2. 「独立自営」の裏面

たとえば建国後のアメリカがその文化的アイデンティティを本格的に問題にしはじめていた一八三二年、ナサニエル・ホーソーンはまさに建国期を題材に優れた短編「僕の親戚、メイジャ・モリヌー」を書いている。明らかに建国のプロセスを象徴的なぞるこの物語において、街の有力者である叔父モリヌーの「コネ」を頼って、父母兄弟姉妹と幸せに暮らしていた田舎をあとにボストンにやってきた「抜け目ない」「地方出身」の若者ロビンは、叔父を訪ねて夜の街をさまよい歩くうちにいくつもの不穏かつ夢幻的な場面に出くわす。やがて、あろうことか、ほかでもないその王党派の叔父が暴徒によってリンチされる戦慄的な場面に遭遇してしまうのである。

巨大な人の河がいま街路にどっと奔流してきたかと思うと、教会の方角へゆっくりと波打ってきた。馬に跨った男がひとり、この群集の中から転がるように出てくると、そのすぐ後ろに恐ろしい金管楽器を吹き鳴らす楽隊がつづき、接近するにつれて、ますます鮮烈な不協和音を送り続けていた。……騎馬の男は軍服を着、抜剣をしていたが、進んできたところを見れば、どうやら暴動のリーダーらしく、その獐犷なダブルの顔の色から察するに、戦争の権化というところか。その

真っ赤なほうの頬は火と剣の表象、真っ黒いほうの頬は戦争に付随する悩み嘆きのシンボルというのであろう。……トランペットは凄まじい意気を吐き出すとそのまま鳴り止んだが、人民の叫びも笑いもハタとやみ、沈黙と隣り合わせの絶対的無音だけが訪れた。ロビンのすぐ目の前に、一台の無蓋の荷車が止まっていた。ここはたいまつが最大限に明るく燃えている場所で、月もここでは真昼のように煌々と照っていた。そしてここで、体には煮えたぎるタールを塗られ、鳥の羽を一面にくっつけられた無様なリンチ刑の姿を晒しているのは彼の親戚メイジャ・モリヌーではないか！（ホーソー 37）

ロビンはこの地獄絵図を目の前に非常な衝撃を受けつつ、しかしそれを嘆くのではなくむしろ「目くるめくような興奮」を感じ、異様な「精神的醜態」のなかで叔父を嘲笑しなぶりものにする暴徒の側に自らを置いて、次のような激しい哄笑に身を委ねる、というのだ。

次の瞬間、無精者の、だらけた笑い声が挨拶してくるのがロビンの耳を打った。……こんどは銀の鈴を転がすような笑い声が聞こえ、それから彼の腕をつねった者がいた。……笑いは伝染性をもっていて、群集の間にいまそれが広がっていくところだったので、ロビンもそれに感染し、一声おおきな爆笑をあげたから、それが町中に響きわたった。もはや、いるっただけの人間が腹を抱えて笑い、肺を吐き出すくらいに笑ったが、中でもロビンの笑い声が一番大きかった。（ホーソー 39-40）

ここにあるのは、アメリカという国家、あるいは〈アメリカ人〉という特異な存在の自己形成に関するある極めて透徹した洞察である。民主主義国家アメリカにおいては、そもそも生まれた段階ではさまざまな偏差とともにある人間を理念的な意味においてトクヴィル（Alexis de Tocqueville）も驚嘆した「諸条件の平等」の原則にたがわぬ存在とするために、その存

在をいわば〈抽象化〉する必要があった。このロビンの笑いは、彼がまさに「アメリカの建国」という事態によって「メイジャ・モリヌーの血縁者ロビン」という具体性や肉体性を伴った存在から〈アメリカの個人〉という抽象的存在へと見事に変貌を遂げたことを意味しているのだ。拙訳で「独立宣言」の次の冒頭の文言を確認しておこう。

われわれは、以下の真実を自明のものとする。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている。こうした権利を確保するために、人々の間に政府が樹立され、政府は統治される者の合意に基づいて正当な権力を得る。そして、いかなる形態の政府であれ、政府がこれらの目的に反するようになったときには、人民には政府を改造または廃止し、新たな政府を樹立し、人民の安全と幸福をもたらす可能性が最も高いと思われる原理をその基盤とし、人民の安全と幸福をもたらす可能性が最も高いと思われる形の権力を組織する権利を有する。

このような世界像は「真実」かつ「自明」のものである、とまでこの宣言は謳っている。このことがアメリカ人の精神形成に及ぼす影響の重要性はいくら強調してもしすぎることはない。この論考の関心のもとでこの宣言の含むところを言い直せば、アメリカに生まれた人間は、自分を「創造」してくれたのは両親ではなく「創造主」であると考えてることによって、すべて平等な「アメリカのアダム／イヴ」たる〈アメリカ人〉となる。彼／彼女は、生まれた土地、親やそこでの慣習を自らの自由意思で「改造または廃止」し、「幸福の追求」の原則のもとでやがて新たな土地で配偶者と出会い、お互いの「合意に基づいて」新たな家庭をつくることだろう。そこで育った息子や娘は、再び血縁関係を自らの意思で「廃止」し、「人民の安全と幸福をもたらす可能性が最も高いと思われる形の権力」の形態を探しもとめて移動しもあるだろう。こうして「アメリカのアダム／イ



ヴ」再生産のプロセスが続いてきたわけである。

しかしここで大事なのは、「メイジャ・モリヌー」のホーソーンがこの事態をまったく「自明」なものとは見ていないということである。作品結末近くにおけるロビンの笑いは、端的に言って神経症的な笑いである。叔父が目の前でリンチされて心から笑える人間がどこにしよう。実際、物語の最後でロビンの「頬は青ざめ、目は今夜の初めの活気を失っていた」(41)。たとえば斎藤眞は、

機会の倫理は、独立自営という積極面を要求する。独立した人格が、みずから主体として生産に従事する。これが、アメリカン・デモクラシーのあるべき姿なのである。こうして、自律的人格が要請される時、その内面的基底として、ピューリタン信仰が、あるいは脱宗教化されたピューリタン倫理が指摘されよう。……絶対者としての人格神との対面の意識のもとに培われる厳格な自己規律・自己責任のエトス [は]、自発的な決定参加にとって大きな支えである (45)

と「独立自営」を「積極面」として語ってみせるが、日本の「敗戦後」を一面からリードしたこのアメリカ政治学者の言を踏まえつつ私の言葉で敷衍してみれば、「メイジャ・モリヌー」で言われていることはそれとはまったく逆の事態となる。すなわちホーソーンは、都会に出た田舎の「抜け目ない」若者ロビンを応援することで、まさにここでいう「内面的基底」としてのピューリタニズムに生きるごく一般的なアメリカ人を確かに斎藤風に「積極的」イメージとして寿ごうともしつつ、しかし同時にそのような「独立自営」の存在とは、すなわち自らの一部でもある血縁者を他の名もなき民衆たちと一緒に象徴的に血祭りにあげたのち、その痛みを抑圧して笑う空虚で神経症的な〈個人〉の姿にほかならない、という、斎藤のものとはまったく逆のネガティヴな分析を強調してみせてもいるのである。端的に言って、ここで象徴的に殺されているのは決してモリヌーのみではない。ロビン自身の存在の一部がここで〈アメリカ〉の手によって、そして

そこに加担する自らの手によって抹殺されている。それはほとんど〈悪魔との取引〉を思わせるまがまがしきである。ロビン自身、自らが故郷をあとにしてきたことの全的な意味が眼前に繰り広げられていることは分かっているはずである。ただし、いまわしき〈過去〉と是が非でも訣別せねばならなかった日本の「戦後思想」の牽引者のひとりにとって、戦勝国アメリカの理念の根源である〈過去との断絶〉自体にはらまれるこのような問題はむろん見えていない。

### 3. 〈ギャツビー〉の誕生 = 〈近代〉の軌跡

さて、『ギャツビー』に視野を戻せば、ここで当然ギャツビーの「出自」に関する以下の事情が思い出されるはずである。

ジェームズ・ギャツというのが彼の本当の、少なくとも親からもらった名前だった。十七歳のときに、彼はその名前を変えた。……とは言っても、それは急に思いつかれた名前ではなく、前もって用意されていたのだろう。両親はうだつが上がらない貧しい農夫で、彼の想像力は断じてその二人を、自分の本当の親として認めはしなかった。ロング・アイランドのウエスト・エッグ在住のジェイ・ギャツビーは、彼自身のプラトンの純粹概念の中から生まれ出た像なのだ、というのがこの真相である。彼は一人の神の子供——一般的表現としてではなく、まさしく文字通りの意味で言うのだが——として、父なるものの仕事に従事し、卑しく、けばけばしく、とどまるところを知らぬ美に仕えるしかなかったのだ。こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人間を創造したのである。それはいかにも十七歳の少年が造り上げそうな代物だった。そして彼は最後の最後まで、その観念に対して忠誠を貫いた。(95)

このパッセージの深層にあるのは、まさに先述の「メイジャ・モリヌー」でまがまがしく描きだされていた〈血縁の抹消〉という事態にほかならない。

彼はホーソーンのロビン同様、〈アメリカ人〉として「絶対者としての人格神との対面の意識」を淵源とする「独立自営」の「脱宗教化されたピューリタン倫理」に基づき実の親を象徴的に抹殺することで、日常のレベルには存在しない超越的な神をこそ自らの〈父〉と考えるのである。それによって自らの存在をいわば〈抽象化〉するからこそ、彼は当時のワスプ社会において地歩を固めていくことが可能になった。自らの名前を「ジェイムズ・ギャッツ」というドイツ風の名前から「ジェイ・ギャツビー」というワスプ風の名前に変えることには、そのような象徴的な意味がある<sup>7</sup>。

ギャツビーはこうして血縁を廃棄し、まずはじめにダン・コーディ、そしてコーディが死んでからはマイヤー・ウルフシェイムと、自らの〈父〉を自分の意思で決めていく〈アメリカ人化〉を開始するのだが、彼のバックグラウンドにさりげなく、しかし明確に「ルター派」の要素が含まれていることが記されていることは注視に値する。彼は上記引用部の「自己創造」のプロセスのあと「ルター派」の大学に行っている——「未来の栄光への漠とした直観の赴くまま、彼はその数か月前、ミネソタ州南部にあるルター派のセント・オラフ大学に入学した」(96)——のだし、その死後に父とともに葬式に訪れるのもやはり「ルター派教会の牧師」(165)なのである。

周知のように、ルター派はプロテスタント諸派の起源であり、ピューリタンたちが従ったカルヴァン派の教義を生んだ。それはカトリック的な世界観の支配に反旗を翻したプロテスタントイズムの起点にふさわしく、教会や聖母マリアを含めた聖人の権威や秘蹟ではなく、〈個人の内面性〉の絶対性と合理性とを重んじた。これは、控えめに言ってもまさに〈革命〉と言うにふさわしい思想のうねりであった。ヘーゲルによれば、〈近代〉の革命性とはまずなによりもこの〈個人の内面性〉の絶対性の問題に帰する(グラフ 27)。カトリックの支配が隅々まで及んでいた中世世界が、このルターの導きによって真の意味で近代世界へと移行したということは、この『ギャツビー』という小説を読む上でいくら強調してもしすぎではない。

中世ヨーロッパは、ローマの教皇を中心として位階的に秩序が周辺へと

浸透して行く〈コルプス・クリスティアヌム〉としての全体主義的な有機的世界観のもとにあった。そこでは互いに異なる地域に住む人々を教皇の権威のもとに緊密に結び付けるためにも、マリア信仰や聖人への信仰、さまざまな儀式やそれを執り行う地域の大聖堂、キリスト磔刑図など、目に見えるもの／物質的なものもつ神秘性についての信頼が色濃く息づいていた。そうである以上、ある一定程度以上の存在の抽象化は生じようがない。人は目に見えるものとしての身の回りの地域社会に、また地域の信仰を司る聖人に、あるいは信仰を同じくする友人や知人など周りの人々に、つまり〈故郷〉に、自らの存在を強く依拠しつつ生きているからである。

「信仰する心」という精神的／抽象的なもの以外に義はない、としたルターの教義は、「聖書のみ」をその信仰のよりどころとして、教会も聖職者も聖人も聖母マリアもその信仰の基礎としてはすべて否定し、結果として教会や聖職者の権威、すなわち身のまわりの目に見えるものを救いの拠り所としては信頼しないことになった。「聖書のみ（ソラ・スクリプトゥラ）の権威によって、何世紀にもわたって教会が行ってきた教え——すなわち「伝統」——は無効となる。教会は地上の制度を必要とせず、教皇の権力は贖物である」（ブリュレ 85）。告解の制度も、だから無意味となった。ここで、歴史上はじめて、ひとはある意味でこの〈目に見える世界＝故郷〉の重力や呪縛から解放たれて抽象化し、つまりは〈自由〉になったのである。「独立宣言」の基盤となったホッブスやロック、ルソーの自然法思想／啓蒙思想とともに近代アメリカの屋台骨となって歴史を動かしたピューリタニズムが、このルターの教義に淵源を持ち、その人間観の抽象性をさらに押し進めたものであったことは言をまたない。だから象徴的に言えば、ギャツビーがその存在を抽象化させながらドイツ系移民の父の住む故郷のノース・ダコタからシカゴ、そして大都会ニューヨークへとたどった道は、いわば〈中世ヨーロッパ〉がこのドイツのルター派の淵源を通過してまっすぐに〈近代アメリカ〉へと頂点を目指すようにたどってきた五百年の歴史の縮図にほかならない。

#### 4. 〈近代〉という闘争

佐伯彰一は、『文学的アメリカ』においてホーソンとアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) とを「あまりにも対照的だからどこかくさい」(111) ものとしてコインの表裏の関係において論じているが、よく知られるように、フィッツジェラルドと同時代人だったそのヘミングウェイによれば、「アメリカ小説」の原型は『ハックルベリー・フィンの冒険』にある (Hemingway, *Africa* 29)。彼はいわば上述のようなアメリカ精神に準ずる形で、〈血縁〉の否定と西部「テリトリー」への「どんずら」を強く勧めるこの小説に自らが目指すべきモデルを見出し、〈故郷〉のオークパークに象徴される父や母の権威を否定してスペイン、キューバやアフリカへと移動を続ける壮大な旅に乗り出したことになろう。しかし『迷走の果てのトム・ソーヤー』の後藤和彦に依拠しつつ言えば、当のトウェイン自身はむしろ、寡黙で威厳ばかりある南部人だった父とのあまりにも苦しい幼年時代の思い出から逃げようとして結局逃げられなかった、だからこそ父から逃れることを生涯のテーマにし続けた、というほうが実情である。この事態は、後藤によれば、子どもが十分なアイデンティティを形成するのに必要なだけの親からの承認を与えられることのなかったトウェインの幼年時代の事情に加え、父と暮らした「奴隷制の過去を持つアメリカ南部」という〈前近代〉的地域そのものが持つ磁場の強度が、誰でも存在を抽象化し「初期化」することができる信じられている——南部よりはるかに強く——北部、すなわち〈近代〉の側への離反を決して彼に許さなかったゆえのもの、ということになる。「南部と言うのは、それから縁を切るのに『地獄に落ちる』決意を要求する国だからである」(171)。

ある重要な意味において、この後藤の指摘は特に南北戦争後に急速な近代化の波に洗われたアメリカ南部という特異な土地に住むものだけに限った話ではなく、むしろ〈近代化〉一般という、およそ十五世紀から十六世紀以降のヨーロッパに始まり、やがて全世界へと広がっていった巨大な現象に普遍的に適用できる問題でもある。実際、北部オークパークという故

郷への批判的態度を終生崩さなかった上述のヘミングウェイ自身、トウエイン同様その生涯にわたって親子関係の桎梏から決して逃れられず、だからこそそこから必死で逃避し続けようとした作家でもあったことはもっと注目されねばならない（中野「父の息子」）。短編「父と息子」で、自殺した父のいた故郷を離れて異郷をドライブする作家ニック・アダムズは、広大な平野を横切る一本道で子供時代の父との思い出に心を奪われているとき、横に座る息子から「お父さん、小さかったころインディアンと狩りをしてたとき、どんな感じだった？」（Hemingway, CSS 375）と唐突に呼びかけられ、過去に捨ててきたはずの〈父〉に実は自らがそのまま成り代わってしまっていることを認識させられて眩暈を覚える。「父から逃げる」のではない、「逃げる自分」がそのまま〈父〉なのであり、さらに言えば自らがワस्प男性としての自己を形成するにあたって捨ててきた過去のミシガンの森のインディアンの友人たちそのものでさえあるのだ。

富永健一は、前近代社会におけるいわゆる「ゲマインシャフト（地域共同体）」が持っていた社会的な諸機能を次々に根こそぎにしていったのが〈近代〉という時代であるとしつつ、それでも最後まで「なくなり得ない」ものとして近代・現代社会に普遍的に見られる「核家族」をあげ、それを「近代産業社会におけるゲマインシャフトの最後の抛りどころ」（124）と呼んでいる。このような意味での「近代産業社会」を世界史上最も強く体现する国こそアメリカ合衆国にほかならない。それは、〈近代化〉の根本は「人間解放」のルネサンスにあるのではなくピューリタニズムにこそある、そしてその真髄は科学的精神と合理性である、というウェーバーやトレルチの理解ともむろん重なる（大木 2-22）し、また〈個人〉にその社会的上昇の可能性を全的に夢想させつつ強力に現実的な移動へと誘った「西部」という巨大な「白紙」の空間の存在（の記憶）とも当然関係している。そうであるなら、ホーソーンの示した〈血縁の廃棄〉としての〈アメリカ人〉の自己形成にはらまれた戦慄的なドラマは、アメリカにおいてその最先鋭部に到達した〈近代〉の力が、富永の言う「近代最後のゲマインシャフト」たる「核家族」の内実それ自体をもある特異な仕方に変性さ

せる過程だったということが出来る。ニックによれば、ギャツビーの夢は、まさに近代初期にアメリカを目指したオランダの船乗りたち、あるいは世界で最初に〈近代〉の荒波に乗り出したスペインのエル・グレコの描く未来への狂気をはらんだ夢を思わせる激しさで彼を襲っている――

それでも彼 [ギャツビー] の心は常に激しい騒擾の中にあった。きわめてグロテスクで幻想的な様々の奇想が、ベッドの中の彼を夜半に見舞った。洗面台の上で時計がコチコチと音を刻み、床の上でもつれている彼の衣服に月がぬれた光を注いでいる間、言葉にできないほど俗悪なるものの宇宙が、彼の脳裏に際限なく紡ぎだされた。そして彼は夜ごと、自らの妄想の図柄をさらに豊かなものへと膨らませていった。眠気がやってきて、そこにある鮮烈な情景を忘却の抱擁をもって覆いかくしてくれるまで、倦むことなくそれは続いた。(95)

これを語っているのはもちろんニックだが、これはおそらくそのまま、基本的に自分については多くを語らないニック自身の自画像でもあったはずである<sup>8</sup>。

僕 [ニック] は一九一五年にイエール大学を卒業した。父親も同じ大学をちょうど四半世紀前に卒業していた。卒業からほどなく僕は「世界大戦」という名前で呼ばれる、時ならぬゲルマン民族大移動に巻き込まれることになったのだが、その流れに逆ねじを食らわせる作業を心行くまで堪能したので、帰国してももうひとつ気持ちが落ち着かなかった。かつては世界の心温かき中心であった中西部も、今では宇宙のみすばらしい辺境としか見えなかった。そんなわけで東部に行って証券の仕事勉強してみようと思いついた。……そして何やかやで多少の遅延はあったものの、一九二二年の春に僕は東部にやってきた。もう故郷に戻ることはあるまい、と思いつつ。(9)

つまり、こう言ってよい。〈近代人〉の〈内面性〉とは、激烈な闘争——「激しい騒擾」——の場である。程度の差こそあれ、〈近代社会〉においてひとは、生まれた場所や社会的地位の高低いかんにかかわらず、生後しばらくの間は必ず家族や同年代の友人、地域社会に代表される〈故郷〉のネットワークへの依存の中で形成される自己を生きる。それは〈至福の楽園〉として経験されることもあれば、トウェインのように〈空虚な荒野〉として経験されることもあるだろう。しかしいずれにせよひとは、成長のある段階で、そのような〈故郷〉と自己とのあいだに深い楔を入れ、近代資本主義社会における市場という抽象的な場で〈流通可能〉な一単位となるべく〈都市〉の領域へと向かって自己を再編成していく孤独な闘争を強いられる。特にピューリタニズムという「個々人のかつて見ない内面的孤独化の感情」（ウェーバー 156）を人に強いる宗派の影響下において——つまり〈アメリカ〉において——この闘争はより苛烈となるが、それも通常それとして意識されることはない。だが、彼／彼女が〈故郷〉から〈近代〉つまり〈都市〉へと向かうとき、彼／彼女は決してただ単に空間を移動し、無傷のタブラ・ラサとして〈田舎〉から〈都市〉に参入しようとしているのではない。そのときの彼／彼女の精神には、たとえばここでニックがさっそうと参入しようとしているかに見える「証券業」に代表される近代資本主義経済機構にふさわしく編成し直された故郷の価値体系——フィッツジェラルドの場合、ワスプ社会に対するカトリック的なものの見方も当然そこに含まれよう——がこうむった激甚な傷が残されており、一方で〈故郷〉の領域には父や母、親族や友人、知人たちのみならず、およそ〈都市〉の文化体系には適合しないと判断された自分自身のあらゆる過去の残骸が、すべて取り残されている。

大きく歴史を俯瞰するパースペクティブから見れば、「(第一次)世界大戦」とそれがもたらした激烈な破壊とは、いわば飽和状態にあった〈ヨーロッパ近代〉が「アメリカ化」していくための必然的な第一歩にほかならなかったとも考えられる（麻田 114-16）。そうであれば、この引用部は、「世界の心温かき中心」たる故郷「中西部」から「東部」に出て〈アメリカ



かの個人〉と化していくニックの自我のうちでひそかに繰り返されられたであろう戦いの壮絶さと、その際に打ち捨てられたに違いない〈故郷〉の残骸や破片の影をどこかで象徴的に照らし出す。それらは決して釣り合わないものではない、とフィッツジェラルドは言っているのである。

## 5. 〈故郷〉からの使者

フィッツジェラルドは、晩年の愛人シーラ・グラハム (Sheila Graham) に対してワスプ社会に生きる自らのカトリック性に言及しつつ次のように言っている——「イエズス会の神父はよくこう言ったものだよ、「七歳 [初めて子供が聖体拝領を経験する年齢] まで [子供を] うちに預けなさい。そのころまでに人格というものは出来上がってしまうのだから。人格というものは、その後はもう変わらないものです」(40)<sup>9</sup>。第一セクションで見たニックの思い出の中の帰郷のシーンが距離 (の消失) の力学の悲しみに貫かれていることも、単なる過去へのノスタルジアとしてではなく、そのような文脈においてこそ捉えられねばならない。「あのとときの自分」と「今の自分」とは、果たして同じ〈自分〉なのか? ——〈アメリカ人〉の自我のあり方に関するこのような根源的な問いに対するフィッツジェラルドからのひとつの簡潔な、しかし決定的な答えこそ『ギャツビー』という小説が全体として提示しようとしているものにほかならないのだし、ギャツビーの父親ヘンリー・ギャッツがニックの目の前に現れるあの場面に象徴的に込められているものでもある。ここで小説は、のち一九三六年にウィリアム・フォークナーによって書かれる『アブサロム、アブサロム!』におけるトマス・サトペンの人生の軌跡を予見するかのよう、それまでの神話的な抽象性を崩して一気にリアリズムの世界へと降りてくる。

ヘンリー・C・ギャッツなる人物から電報が届いたのは、たしか [ギャツビーの死後] 三日目のことだったと思う。発信地はミネソタの小さな町だった。すぐにそちらに向かうので自分が到着するまで葬

儀は延期してもらいたい、とだけそこには書かれていた。

それがギャツビーの父親だった。いかにも謹厳実直な顔つきの老人で、困惑し、途方に暮れた様子だった。九月の暖かい日だというのに、丈の長い安物の厚いコートに身を包んでいた。気が高ぶるあまり、目を終始うるませ、僕がその手からかぼんと傘を受け取ったあと、ぼそぼそと生えた白髪の前髪をひっきりなしに引っ張り始めたものだったから、なかなか外套を脱がせることができなかった。今にも倒れこみそうな様子だったので、音楽室に連れて行って座らせ、食べるものを持ってこさせた。でも彼は何も口にしなかったし、手の震えるために、ミルクはグラスからこぼれ落ちた。(158)

のちに検討するように、ギャツビーはデイジーに娘がいることを知っていたながら「デイジーに子供がいるということが、その生身の子供を目にするまでは、どうしても信じられなかった」(111)のだが、この父親ヘンリーの登場シーンが真に衝撃的であるのは、この時点まで、まさにニックも本当の意味でギャツビーに父親がいるとは考えていなかったに違いないからである。精神の基底において「両親／故郷の存在」を廃棄してしまっている〈アメリカ人〉にとって、このことはいわば世界理解の「死角」のようなものとなる。人間にあたかも〈故郷〉がないかのような大前提のうえに成り立つ国家のうちでまぎれもなく両親から生を享け、生を営み、だからこそその営みにおいて自ら〈故郷〉を〈廃棄〉しているという事実自体に気づくことができない——そのように考えるとき、たとえば第六章、トムとデイジーとを招待したパーティでデイジーから思うような反応を得られなかったことに失望したギャツビーが、デイジーと相思相愛だったころのルイヴィルでの日々について感傷的に語るのを聞くニックがもらず次の不可解な一節には、一種鮮烈な意味が見えてくるはずである。

五年前、ある秋の日、二人〔デイジーとギャツビー〕は枯葉が舞う街路を歩いていた。やがて樹木がなくなり、歩道が白い月光に洗われ

ているところに着いた。二人は見つめ合った。……ギャツビーは目の端で、何ブロックもまっすぐに続く歩道が紛れもなく一本の梯子となって樹木の頭上にある秘密の場所に届いていることを見て取った。もしも一人だけでそこに上ろうと思えば、上ることができる。そしていったんそこに上がってしまえば、生命の乳首に吸い付き、比類なき神秘の乳を心ゆくまでのみくだすことができる。

……

ギャツビーのそんな話に耳を傾けているあいだ、そのあまりの感傷性に辟易しながらも、僕はずっと何かを思い出しかけていた。捉えがたい韻律、失われた言葉の断片。遙か昔、僕はどこかでそれを耳にしたことがあった。ひとつの台詞が口の中でかたちをとろうとして、僕の唇は聾啞者の唇のようにしばし半開きになっていた。驚きの空気を外に吐き出すという以上の何かをそれは希求し、あえいでいた。しかし結局声にはならなかった。思い出しかけていたものは意味のつてを失い、そのままどこかに消えてしまった。永遠に。(106-07)

ここでニックは、ギャツビーからデイジーの故郷ルイヴィルでの思い出話を聞かされながら、「驚きの空気を外に吐き出すという以上のなにかを希求し、あえ」ぎさえしながら、「遙か昔」の「どこかで」「耳にした」何を思い出しそこねているというのか。そもそも、ギャツビーの言葉の「あまりの感傷性に辟易し」ているはずのニックの言葉自体、まさにそのような「あまりの感傷性」をたたえているのはなぜなのか。テキストは、それらの疑問に最後まで答えない。ニック自身、そのことに答えられないからである。だが、ここでの我々には、ニックがこのようにしかそのことを語りえない理由も含めて、それらの疑問への答えがぼんやりと見えているはずである。

「メイジャ・モリヌー」のロビンのように〈アメリカ人〉として父のいた〈故郷〉を廃棄したギャツビーだったが、〈母〉はどうだったのか。「生命の乳首」／「比類なき神秘の乳」に「吸い付き」「のみくだす」乳飲み子としてのギャツビー——明らかにここでは、〈故郷〉においてかつて彼が

経験したこともあっただろう〈母と子〉の理想的な関係のイメージによって、もはや手の届かないルイヴィルの街とデイジーとの思い出が染め上げられているのである。〈父〉のイメージが遍在するこの小説の表面において〈母なるもの〉は奇妙なほど不在であるが、デイジーが娘の母であることがのちに述べるように非常に重要な意味を持つことや、なによりもこの作品の最後に提示される作品中最重要のイメージ、つまりギャツビーの死後に東部の腐敗に幻滅して故郷に帰るニックの幻視する「オランダ人水夫たち」が見たものこそ「新世界のあざやかな緑なす乳房」(171)にはかならない、ということなどに鑑みれば、〈アメリカにおける故郷の抹消／喪失〉こそがこの小説の最大の主題であるというこの論考の文脈において、〈不在の存在〉としての〈母なるもの〉のイメージの意味は逆に強く引き立ってくる。事実、ひき逃げによって死に至るマートル・ウィルソンの描写について、フィッツジェラルドは「マートルの乳房は是が非でも引き裂かれねばならない。そのものズバリが必要なのだ」と、この部分の描写の妥当性を疑う編集者マックスウェル・パーキンスに向かって強調しているのである (*Letters* 94)<sup>10</sup>。

だから戦争からの帰還後、デイジーとの思い出を求めてギャツビーが街をさまよったのちにそこから電車で離れて行くときの次の描写は、そのまま「ジェイムズ・ギャツ」がその故郷を離れるときに置き去りにした〈もう一人の自己〉がどこかで感じていたはずの心の反映となっているはずだし、またそれを語っているニック自身が自らの故郷を離れるときの事情ともどこかで必ず重なっているはずである。

線路はカーブしつつ、太陽から離れていった。太陽は低く身を落とし、今は消えんとする都市に——デイジーがかつてその空気を胸に吸っていた都市に——祝福を与えるべく、自らの身を広く延べているかのように見えた。ギャツビーはその空気のせめて一筋をもぎ取ろうと、デイジーが彩ってくれたその場所のかけらをひとつでも取り置こうと、切なく手を前に差し出した。しかし彼のにじんだ目の前を、すべてはあまりにも素早く過ぎ去っていった。そして彼にはわかっている

た。自分がその都市の一部を——深い瑞々しさを湛えた最良の部分を——永遠に喪ってしまったのだということが。(145-46)

ここでギャツビーは、自らが感じている「切なさ」は、デイジーと過ごしたルイヴィルという〈心の故郷〉の喪失そのものではなく、実はその前にすでにして起こってしまっている〈真の故郷〉の喪失にこそ起因する、ということにまったく気付いていない。むしろ、この「切なさ」の深みそれ自体、そのことにまったく気付けないからこそそのものと解しうる。〈デイジー〉とは、その意味でまさにギャツビーにとっての喪われた〈故郷〉の代理なのであり、だから永遠に不完全なものであることを宿命づけられた象徴である。たとえばリーハンはこの小説を「激しいまでにロマンティックな思いと、その思いを物理的、精神的に体現するものが欠けているということについての小説」(Lehan 33)と称したが、まさに至言である。ただし、やはり〈アメリカ人〉のひとりであるリーハンにおけるその「思い (commitment)」とは、すなわち「フロンティアの消滅」によって失われてしまったアメリカ的な「自己信頼」、すなわち古き良き「アメリカン・ドリーム」のビジョンへの思いなのであり (Lehan 34)、ここでの議論とほぼ真逆の方向性を示すものであることは銘記しておくべきだろう<sup>11</sup>。

したがって、父ヘンリーが小説世界の表面にもたらす十六歳当時のジミー少年の手になるベンジャミン・フランクリン風の日課表も、これまでのように彼をまさに正統な〈アメリカン・ドリームの体現者〉として証づける事実としてのみ考えるのではなく、むしろ彼がいかにか〈血縁／故郷〉を廃棄するために過剰なまでに「ワズプ」的なプロテスタンティズムのエートスを自らのうちに叩き込もうとしていたのか、しかしいかに結局それを完全に内面化することができなかったのかを、さりげなく、しかし雄弁に示すものと考えねばならないだろう<sup>12</sup>。

起床

午前六時

ダンベルと壁登り

午前六時十五分—六時三十分

電気などを勉強	午前七時十五分—八時十五分
仕事	午前八時三十分—午後四時三十分
野球などスポーツ	午後四時三十分—五時
演説の練習、風格を身につける	午後五時—六時
有用な発明について勉強する	午後七時—九時

その他の決意

「シャフターズ」や「……」（名前は判読できない）で時間を無駄にしないこと。

巻きタバコ、噛みタバコはもうやめる。

一日おきに風呂に入る。

有益な本か雑誌を週に一冊は読む。

週に三ドル（五ドルとあったのが消されている）貯金する。

両親にもっと良くする（164）

たとえばこの「シャフターズ」、あるいはもはや名前も分からない「……」という店で「時間を無駄に」することは、「ジミー」少年にとって、また「ジェイ・ギャツビー」となりおおせた後の彼にとって、いかなる意味があったのか。なぜ少年は、わざわざそれをこのようなかたちで書き記さなくてはならなかったのか。これらの故郷の飲食店で彼は、同性の同年輩、あるいは年上／年下の友人たちと、時には異性と、故郷の風景や時間に深く染め抜かれた身体で、「無駄」なタバコを巻き、噛んだことがあったはずである——「[ギャツビーは] 年若いうちに女を知ったが、いつもちやほやされていたために、彼女たちを軽侮するようになった」（95）。〈ギャツビー〉自身、たとえば死ぬ直前におそらくこの日課表の存在自体をほとんど思い出すこともなかっただろう。父ヘンリーによれば、彼とギャツビーとは、彼が家を「飛び出して」からは「親子の縁は切れて」いた。しかし「二年前」彼がひょっこり父のもとを訪れて「以来、成功を重ねるたびに私 [父ヘンリー] にはよくしてくれよりました」という（163-64）。もはや自分自身が覚えて

さえいない、しかしこのようなかたちで父親のヘンリー、そしてその存在すらも言及されることのない名もなき母親の脳裏には鮮明に焼き付いていたはずの〈故郷〉におけるジミー少年のさまざまな存在の破片は、〈故郷〉を出てひたすらさまよった挙げ句に死に至る直前の〈ギャツビー〉にとって、一体どういう意味を持っていたのか<sup>13</sup>。次の引用は第一章、デイジーとトムに故郷での女性との噂話についてニックが問いただされる場面である。

「ひとつ大事なことを尋ねるのを忘れていたわ。西部にいる女性と、あなたが婚約したっていう話を聞いたんだけど、それは本当？」

「そうそう」トムが加勢するように口を添えた。「君が婚約したという話を確かに耳にしたぜ」

「それはでたらめだよ。こんな貧乏な身で、結婚できるわけがないじゃないか」

「でも私たち、たしかな話として聞いたのよ」、デイジーは引き下がらなかった。あたかも花が咲き開くみたいに、彼女が生氣を取り戻したことに、僕は少し驚かされた。「三人の人から同じ話を聞かされたんだもの、根も葉もないとは言えないでしょう」

彼らがなんの話をしているのかむろん見当はついたが、僕としては婚約なぞした覚えはまったくない。ただし、ある娘と結婚するのだろうという評判が立ったことは確かで、それも僕が東部に越してきた理由のひとつである。うわさがあるからといって、幼馴染との交際を急に絶つわけにはいかないし、かといって流れに引きずられるままに身を固めるつもりもなかった。(24)

一緒にいれば楽しい、しかし自分にはどこか「ふさわしくない」と感じられる、だからそのうち永遠に別れ、その事実を思い出もしないことそれ自体に思っていたことさえほとんどないだろう何人かの「幼馴染」たち、恋人たち、なによりも親や血縁者と過ごした「無駄な時間」(たとえばジミー少年は「豚みたいな食べ方をする」と父を叱ってさえいる (165))

——故郷を捨て、儉約と勤勉と「有用性」獲得へのあくなき努力によって孤独に自らを「高め」、いずれは〈神〉にさえ近づかねばならないと脅迫的に〈個人〉を駆り立てるこの社会において、それらの「つながり」はいったいどのような意味をもちうるのかをこそ、この小説は渾身で問う<sup>14</sup>。デイジーとジョーダン・ベイカーがまさに文字通り「同郷の友人」同士であることにはだからこそ意味があるのだが、それも大きく言えば次のようなニックのコメントへと収斂されていくことになるだろう——「結局のところ、僕がここで語ってきたのは西部の物語であったのだと、今では考えている。トムもギャツビーもデイジーも、ジョーダンも僕も、全員が西部の出身者である。たぶん我々はそれぞれに、どこかしら東部の生活にうまく溶け込めない部分を抱え込んでいたのだろう」（167）。「誰も彼も、かすみたいなやつらだ」「みんな合わせても、君一人の値打ちもないね」（146）というセリフにあざやかに示されることになるニックとギャツビーの友愛は、そうであるからこそ一層その輝きを増す。ギャツビーは、いわばその苛烈なまでの孤独と自己創造を余儀なくされる〈アメリカ人〉としての人生においてニックが初めて見出した、まさに先に見たようなかたちで自らが捨ててきた〈故郷〉をかすかに思い出させる鏡のような存在だったからこそ、ニックにとっての「親友」（159）となった。ギャツビーの微笑みは「自分が「ここまで理解してもらいたい」と求めるとおりに、あなたを理解してくれる」（49）ようなものだったとニックは言うが、彼の微笑みに映し出される自らの失われた記憶の断片は、ニックのなかで最後にはトムやデイジー、あるいはジョーダンにさえも波及し、喪失した〈故郷〉を彷彿とさせるひとつの疑似共同体を幻出させる。アメリカ人としての存在の抽象化の中でどうしても抽象化しえなかった〈故郷〉での具体的なつながりの持つ重みが、都会を生きるバラバラの〈個人〉を囚わずもこのように呼び寄せている。

したがって、壮麗なるギャツビーの邸宅で葬儀の準備をするニックの前に安手のコートに身を包んで現れたしがいないヘンリー・ギャッツが、よく読めば実はむしろ成功したあとのギャツビーと「うりふたつ」であるのは



当然である。

「この写真をですな、ジミーが送ってくれました」、彼〔ヘンリー・ギャッツ〕は小刻みに震える手で札入れを取り出した。「見てください」家の写真だった。角のところがぼろぼろになり、多くの人の手から手へ渡ったらしく、ずいぶん汚れていた。彼はすべての細部を熱意をこめて僕に示してくれた。「これを見てください!」と言って、僕の目に賞賛の色を求めた。その写真をずいぶんたくさんの人に見せてまわったのだろう。そのせいで今は、実物の家よりはむしろ写真の方が、彼にとってはよりリアルになってしまっているらしかった。(163)

全体でほんの数ページの登場だが、このヘンリーとニックの対話のシークエンスで読者が強く印象付けられるのは、端的に言って「この親にしてこの息子あり」という「絶対の真理」のようなものにほかならない。その「寄る辺なき、困惑しきった」様子は、ニックの家でのデイジーとの五年ぶりの再会のシーンの際の、あるいはパーティにトムとデイジーを呼んだ挙句デイジーをうまく楽しませることができなかったことに困惑しきった際のギャツビーをどこかで彷彿とさせずにはいないだろうし、特にニックに息子の自慢話を語って聞かせつつニックの顔色をうかがってその価値を確かめようとする場面など、まさにデイジーとの再会直後、邸宅を案内しつつデイジーの顔色をうかがいながらひとつひとつのアイテムを新たに再評価しようとするギャツビー自身にそっくりなのである。

つまりギャツビーは、過去を抹消するどころか、〈父〉をそのまま引きずって生きていたことになる。ここでは、〈家庭＝故郷〉というひとつの有機的システムを、「親」という〈個人〉と、それとはまた別個の自律的存在である「子」という〈個人〉としてとらえる近代の通常の間観が、本質的な意味で厳しく相対化されている。ニックはこのような父を前にどこか「居心地が悪い」(160)と感じているが、それは息子の死を悲しむよりも先に息子の業績を誇り、それによって父がむしろ自らを誇っているか

のように感じられるからだけではありえない。それがまるで自らの〈故郷〉と自分の関係の本質を、だから自己自身の存在の根源を客観的に映し出しているかのように感じられてならなかったからである。

## 6. 離婚とアメリカ人

ここで問題にしていることは、この物語の中心にあるギャツビーのデイジーとの関係にも色濃く影響を与えている。ギャツビーとデイジーの関係はむろん「緑の灯」の意味や階級の問題など、これまでもさまざまな角度から検討され尽くされてきた観のある問題だが、ここではそれとは全く違った角度から再度問題にされねばならない。男女の性愛関係こそは、当然ながら子供の問題、すなわち血縁の問題の根本であるからであり、だから〈故郷〉の問題の根本にほかならないからである。結婚というものがひとつの社会制度なのであれば、制度とはあくまでも個人の「合意」に基づいて社会的に承認されるべきものであり、だから成立も破棄も相互の意思によって自由に成り立つ、という〈アメリカ人〉の制度観／人間観の問題は、男女の、そしてその男女の結びつきから生まれた子供とふた親との関係において集中的に露出するだろう。

デイジーをめぐる三角関係において、ギャツビーはデイジーとの不倫をおそらく「不倫」と考えてなどいない。

彼 [ギャツビー] が求めているのはただひとつ、デイジーがトムに向かって「あなたを愛したことはただの一度もありません」と告げることだった。彼女がそのひとことで四年にわたる結婚生活を帳消しにしたあと、二人はより実際的な行動に移ることができる。そのひとつは、自由の身になったデイジーと二人でルイヴィルに帰り、彼女の実家で結婚式を挙げることだった。五年の歳月などなかったかのよう  
に。(105-06)

ここにあるのは、いわば自分とデイジーの関係は真実に基づいている

が、トムとの関係は虚偽以外の何ものでもないのも、もしもデイジー自身もそのような意向を持っていれば、そのような虚偽の関係を真実の側が糾弾し、その結果その関係を「帳消し」すなわち「廃止」することには何の問題もないし、むしろ問題があると考えerるほうがおかしい、というアメリカ特有の思想である。ここで大事なことは、ギャツビーがそう考えているというだけでなく、おそらく実際にギャツビーはデイジー以外の女性を性的対象として見ていないだろうから、女性関係も放縦なトムとの比較において実際に彼の「愛」は確かに「純粹」なものであるわけで、「五年の歲月などなかったかのように」という部分を除けば、ニックにとっても読者にとっても基本的にギャツビーはここで正しいことを言っているようにしか見えない、ということである。実際、第一章でトムの浮気にデイジーが苦しんでいるという現実を知ったニックは、次のように言うのだ——「デイジーのとるべき道は、どう考えても、子どもを両腕に抱きかかえてすぐにでもあの家を飛び出すことだ」(24)<sup>15</sup>。同じような言葉はこの小説中でほかにも見つかる。マートルの妹キャサリンとニックの以下のようなやりとりである。

キャサリンは僕のほうに身をかがめ、耳元でささやいた。

「あの二人はどちらも、自分の結婚した相手に我慢できないのよ」

「そうなんだ」

「ぜんぜん我慢できないわけ」、彼女はマートルを見て、それからトムを見た。「私に言わせれば、そんなに嫌なら、なんで一緒に暮らし続けてるわけってことになるんだけどね。もし私があの人たちだったら、今すぐにでも離婚して、結婚しなおしちゃうんだけどな」(35)

デイジーとトムは、本来ならば一刻も早く離婚するべきである——そのように考えるからこそ、結局デイジーとトムがそれでも離婚しないで「もとの鞆」に収まってしまふこと理由をこれまでさまざまな評者が怪訝な目で解釈してくることもなった。打算的なデイジーは結局トムとの安定

した暮らしに目がくらんだのだ、やはりギャツビーとの結婚はそもそも階級やライフスタイルが違うので無理だったのだ、あるいはそのくらい当時の父権制社会における彼女の精神は不安定だったのだ、などがその主な理由として挙げられるだろうが、そうとでも考えなければ、本来であれば離婚すべきなのに離婚しないことに対して理由が付けられないのである (Lehan 74-75; Fryer)。しかし、たとえばカトリック教徒であれば、そもそもここでのニックやキャサリンのようには考えない。結婚は人間の自由意思で生起するものではなく、神の意思によってなされるとされているからである。ともに敬虔なカトリック教徒だった両親のもとで育ち教育を受けたフィッツジェラルドが、そのことを意識していなかったはずはない。事実キャサリンはこの直後「[デージーは] カトリックだから離婚なんて問題外ってわけ」(36) と言うのだし、何より作者自身がこの小説には「カトリック的要素がある」(Dear Scott 61) と断言している。彼は、ゼルダというさまざまな意味において瞠目すべき人格との非常に苦しい結婚生活のなか、たとえ愛人と暮らし、離婚を真剣に考えたことがあったとしても、結局のところは死ぬまで離婚をしなかった (Milford 275)。おりしもこの小説の執筆最終時期においては妻ゼルダの初めての「不倫」問題での深刻な打撃のうちにあり、その際は離婚、さらには相手の男性との「対決」の話さえ持ち上がっている (Bruccoli 195-6)。こと「不倫」と「離婚」に関する問題がこの小説でプロット上最大の問題のひとつとして取り扱われる以上、作者の関心がそこに極度に集中していただろうことは間違いない。

したがって、この論考の文脈において、これまでの議論で決定的に見落とされてきたと考えられる問題は、たまたまギャツビーの場合は「デージーとの過去を完全に取り戻してみせる」という要求が誰の目にも「明らかに望みすぎ」のものであったために失敗したが、もしもギャツビーがそのような「無茶」を言わず、デージーとトムとがまさに「正当」と考えられる条件下で「正当」に離婚することになった場合、それまでの二人の結婚生活の過去はどうなるのか、ということにほかならない。端的に言ってこの事態は、前セクションで論じたような意味で、まさに人間と〈故郷〉

との関係を廃棄したうえで人間を個人単位で原子論的に考えることから必然的に起こる事態だからである。フィッツジェラルドは、離婚を何度考えながらも、心のどこかではおそらく、結婚は一度行ったら絶対に——「愛人」の存在の有無にかかわらず——離婚があるべきではないし、それはたとえそのことで「より不幸」になっていくことが明らかであってもそうであるべきである、と「非アメリカ的」に考えていたはずである。それはむろんゼルダの病状に対する南部人的な強い騎士道／責任感、あるいは彼自身のカトリック的なバックグラウンドともむろん大いに関係はしているだろうが、本質的にはそれはおそらくそのような外的な要因のみに起因する問題ではなく、この小説について見てきたような意味で、人間にとっての〈過去〉や〈故郷〉の意味に関する彼独特の感受性、あるいは覚悟の問題であったことだろうと考えられる。その覚悟は、おそらく伝記的にも良く知られた彼にとっての最愛の娘スコッティーの存在の意味にも、したがって彼自身にとっての父エドワードや母モリーの存在の重要性にも大いにかかわっていたことだろう（Meyers 5; Le Vot 4-7; Brucoli 21-2, 308-9）。

私は以前、ホーソーンの『緋文字』において、ヘスターとディムズデルがそれぞれの重い苦悩を解決するべくボストンから逃げようとするとき、娘パールはいったいどうなるのか、という問題が作品一番の焦点——あるいは登場人物たちにとっての最大の〈死角〉——となっていることはあまり知られていない、と論じたことがある<sup>16</sup>が、それと同様に、ここ『ギャツビー』においてもおそらく最も先鋭的に物語を決定付けているのが親の問題であると同時に子供の問題であることも、やはりこれまで論じられたことはない。それ自体、〈血縁／故郷の廃棄〉の問題がアメリカにおいていかに徹底して「自明」のものであるかを証づけているだろう。

……そこに洗濯したての服を着た乳母が、小さな女の子 [パメラ] を連れて部屋に入ってきた。

「ああ、私の素敵な天使さん」と彼女 [デイジー] はどろんとした声で言って、両腕を前に差し出した。「さあ、あなたをだーい好きなお

母さまのところにいらっしやいな」

……

ギャツビーと僕はかわりばんこに身をかがめて、いやいや差し出された小さな手をとった。ギャツビーはそのあともじっと、驚きの目で子供を眺め続けていた。デイジーに子供がいるということが、その生身の子供を目にするまでは、どうしても信じられなかったのだろう。

……

「この子は父親には似ていないの」とデイジーは説明した。「私にそっくりなのよ。髪も、顔のかたちも、私にそっくり」

……

「さあ、いってらっしやい、スイートハート！」

心惜しそうにうしろをちらりと振り返りながらも、しつけのいい子供らしく、乳母に手を引かれて部屋を退出した。それとちょうど入れ違いに、トムがジン・リッキーのグラスを四つ持って戻ってきた。グラスの中には氷がたっぷり入って、からからという気持ちのよい音を立てていた。

ギャツビーは自分のグラスをとった。

「本当に涼しげに見える」と彼は言ったが、見るからに緊張がうかがえた。(111-12)

デイジーには娘がいる——長い引用になったが、これは端的に言って、先ほど見たギャツビーの父が現れるシーンと同等の衝撃力でギャツビーの思想、つまり近代アメリカの人間観が強く相対化される瞬間である。ここにおけるギャツビーの「緊張」は、象徴的にはそのことを意味する。デイジー本人とて、トムとの離婚を真剣に考えてもいたことは事実だろう。だが結局彼女は離婚を選ばない。理由はさまざまあるだろう。しかし最も決定的な問題は、この論考の文脈においてはこの娘パメラの存在以外にありえない。それは次のトムのセリフにもある「どうしても忘れられない」ことの筆頭なのである。

「ああ、あなたはあまりに多くを求めすぎる！」と彼女 [デイジー] はギャツビーに向かって叫んだ。……「彼を愛したこともかつてあった——でもそのときだってあなたのことも愛していた」

ギャツビーは目を見開き、それから閉じた。

「私のことも愛していた？」と彼は繰り返した。

「それだって眉唾だな」とトムは痛めつけるように言った。「デイジーは、君が生きているかどうかさえ知らなかったはずだ。いいか——僕とデイジーのあいだには、君には知りようもないことがいくつもある。君はご存じないが、僕ら二人にはどうしても忘れられないことがな」

その言葉はギャツビーにはぐっとこたえたようだった。(241-42)

つまりデイジーは、いくら本人がそうしたくても、離婚はできない。正確に言えば、デイジーはたとえ法的に離婚はできても、より本質的な意味において結婚を「なかったことにする」ことはどうあってもできない。それはひとえに、確かに彼女とトムとの「あいだ」にはさまざまな結婚生活の事実がすでにあるからであり、その化身であるこのパメラがいるからである。まさにカトリック教会が離婚に対して取る姿勢が、彼女に子供がいるという事実によって世俗の領域で象徴的にここに現出している。こうして家族を作った以上、それは娘パメラの〈故郷〉になるのであって、だからもはやこの二人に〈アメリカの個人〉の「自由」はない。すでにして、この三人はそれぞれ〈父〉〈母〉〈子〉として〈故郷〉との抜き差しならぬ関係のなかに生きているのである。もちろんそれが単にカトリックの教義の問題以上のものであることは、すでに見たギャツビーとその父の間にもあった「親子の相似」の主題がここにも顔を見せていることに照らしても明らかだろう。カトリックの教義の及ばぬ存在の深淵の領域において、すでに娘パメラは母親デイジーに「そっくり」なのであり、それはつまりこの娘パメラはデイジーとは独立した〈個人〉でありながら血縁によって分かちがたくデイジーと結び付けられてもおり、だからもともと血縁関係に

はなかったトムとデイジーを結びつけてもいる、ということである。パメラが部屋を出ていくと同時にトムが部屋に入ってくることにはそのような含みがある<sup>17</sup>。

アメリカ人は、決して創造主が作った「アダム」でも「イヴ」でもない。ちょうどこのパメラのようにそれぞれ〈故郷〉で生まれ育ったふた親の結びつきから生まれ、自らそのふた親と〈故郷〉との関係の中で必死に自己を創ってきた事実が、ある特殊なイデオロギーの中で自分でも思い出せないようになってしまっているに過ぎないのである。

### 終わりに——アメリカ再建のビジョン

「故郷には二度と帰らない」つもりで東部に出たというニックがギャツビーの死後に再び故郷に帰り、ここで論じてきたような主題に貫かれた小説を「血縁」や「故郷」のイメージのなかで始め、そして閉じていることは、つまりは自らの〈アメリカ人〉としての〈故郷〉に対する関係の性質をギャツビーとの経験の総体を通して彼が初めて客観的に認識し、それによって彼の世界観、人間観が大きく変わり始めたということを意味するだろう。以上で論じたことは、よく「ダブル・ビジョン」という文脈から論じられるフィッツジェラルドのアメリカ社会におけるインサイダー／アウトサイダーとしての存在の仕方の特異性から生まれたものと考えられる(Bruccoli 23; Giles 178-79)。「内」の問題が最もよく見えるのは、「内」のものでなく「外」のものでなく、なにより「内」を深く生きようとする「外」の人間にほかならない。この小説においてフィッツジェラルドは、ここで私が示したような意味で、人間観を多少なりとも本質的なかたちで問い直すことをアメリカの読者に対し提唱している。

むろんそれは、その〈個人〉の生成プロセスのうえにルター以来の〈近代〉の歴史が託し続けてきた夢の意味やその価値を十分に認識したうえでのことである。〈出自に縛られない個人〉の観念があったからこそアメリカは〈アメリカ〉であり続けてこられたのだし、その魅力に引き寄せられて世界中から人々がアメリカを目指した。そのようなアメリカの夢を自ら



深く生き、だから血縁や故郷を決定的に喪失しようとしながら——あるいはそうだからこそ——「半分はブラック・アイリッシュで、半分はやたらどうぬぼれの強いオールド・アメリカン・ストック」として主流社会の内なるアウトサイダーとしての意識から逃れることのできなかった彼なればこそ得られたそのようなビジョンを、安全に「内」にだけいるニックのような人物にこそ是が非でも引き受けさせねばならない、と彼は思ったはずだ（Allen 21-23; 武藤）。

ギャツビーは緑の灯火を信じていた。年を追うごとに我々の前からどんどん遠のいていく、陶酔に満ちた未来を。それはあのとき我々の手からすり抜けていった。でもまだ大丈夫。明日はもっと早く走ろう。両腕をもっと先まで差し出そう。……そうすればある晴れた朝に——  
だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも。（171-72）

ホーソーンのロビンが見たアメリカの夢がその九十年後にはじけて消えた後、こうしてニック・キャラウェイは〈故郷〉へ帰る。それは、〈アメリカ〉を、つまり前のめりの〈近代〉を、〈過去〉として棄却しようとするのではなく、それを十分に踏まえながら全く新たな人間観とともに始めるためだったのだろう。それ自体、すぐれて〈アメリカ〉的振る舞いである。ボートが過去へと引き戻されつつも未来へ進むというのも、そのような様態を指す表現に相違ない。アメリカ人であることの意味、その孤独の意味をこのように根源的な視点から批判的に追求しつつ、だからこそこの小説は最終的に〈アメリカ〉をさらに深く寿ぐことができる。祖先たちはなぜアメリカにやってきたのか。そしてこれからアメリカ人はどのように、どこへ向かうべきなのか——一九二五年にフィッツジェラルドが残したこのような本質的な問いは、翻ってすでに一九四五年の敗戦後のほぼ七〇年を、新島襄や内村鑑三、新渡戸稲造の時代も考慮に入れればほぼ一五〇年にわたって、〈アメリカ〉のプロテスタンティズムの倫理にかつ

寄り添い、かつ微妙な距離を取りながらあいまいに生きてきた日本人全体の過去やこれからの未来の理解をもその根底から問い直す射程を持つものであるように私には思われるのだが、もはやそれは稿を改めて考える問題となる。

## 注

- 1 『グレート・ギャツビー』からの引用の日本語訳は全て村上春樹訳による。
- 2 Edwin Fussel の“Fitzgerald’s Brave New World”は、この点に敏感な初期の批評として特筆に値する。ここで彼は、ギャツビーの体現するものを「新世界が……際限のない、世俗的な人間の欲望を満たしてくれる」という「非現実的な夢」であるとし、「一四九二年までさかのぼるすべてのアメリカ的経験」の帰結としての「成功への夢」を「集団的神経症」と呼びつつ、この小説は全体としてそのような症例に対するフィッツジェラルドの批判的総括である、としている。ここでの私の見解は、これらの「アメリカン・ドリーム批判」の見解の解像度を「故郷」との関係の観点からさらに高めつつ、アメリカ的経験のみならず〈近代〉一般のはらむ問題に対するフィッツジェラルドの診断として『ギャツビー』を読もうとするものである。
- 3 アメリカにおける近年の批評の傾向については Nicholas Tredell (83-88) 参照。宮本陽一郎によれば、「ギャツビーのパーティは、帝国主義の経済のもたらした文化的な問題を象徴的に示している」(62)。
- 4 John C. Callahan (59)、杉野健太郎 (152) 参照。杉野によれば、「ワスプ」の呼称がアメリカ社会に定着するのは 1962 年以降となる (161, 注 1)。
- 5 Michaels (23-28)、Peter Gregg Slater、Michael Nowlin (70) 参照のこと。
- 6 Chase (162-67)、Kenneth E. Eble 参照のこと。
- 7 杉野 (152) を参照のこと。
- 8 Tonny Tanner は、ギャツビーに関するニックの描写がそれ自体ニック自身のことを表している可能性について説得力のある議論を展開している (28-36)。また、上西哲雄はこの物語を「ウォール街の近代化に押し潰されるニックの物語」(14) として読んでおり、広い意味でこの論考の文脈に合致する。
- 9 Paul Giles によれば、この小説は一九二〇年代当時のアメリカにおけるカトリック勢力自体の中に生まれていた二つの方向の狭間の揺れを反映している。それによって彼は、この小説はアメリカの主流に同化しようとするのだけれども同化できないフィッツジェラルドによる「アメリカン・ドリームのパロディ」となっている、としている (178-80)。Tracy Fessenden によれば、ギャツビーは「クローゼットに入ったカトリック教徒」でさえある (204-05)。これらの見解をこの論考の文脈で言い換えれば、つまりこの小説におけるさまざまな〈カトリック性〉は、ギャツビー自身がワスプ化の過程で捨ててきた〈過去／故郷〉のひとつの側面、ということとなる。
- 10 フィッツジェラルドの書き残したものに横溢する父への手放しの愛情表現は、「甘やかされた」と自身表現する母モリーに対する異様なまでの寡黙と好対照である。カトリシズムにおける「聖母マリア」の重要性に鑑みても、彼の〈母〉への思いは非常に複雑かつ痛切である (Brucoli 13-4, 21-2)。

- 11 実際、アメリカの批評家たちは、「国家的な過去（の悪）」を批判する文脈でアメリカの〈過去の抹消〉傾向を問題視するものでさえこのことに対して意識が届かない。たとえば Callahan は、この小説における父ヘンリー・ギャッツ登場の意味を、「神話」に生きようとするギャッツビーを「歴史」の文脈に引き戻す存在、というようにここでの議論と同じような意味で解してはいるが、それはギャッツビーやアメリカそのものが「他者」の現実性を大事にしないナルシシスティックな存在であることをこの父の登場が批判している、という主張であり、つまりもっぱらアメリカ的な「他者——すなわち黒人やネイティブ・アメリカン、その他のマイノリティ——への責任回避」の文脈で論じられる（3-27）。妥当な主張である。しかしそのうえで言えば、ヘンリー・ギャッツの登場は、まずは貧農の家庭に生まれた少年が〈ジェイ・ギャッツビー〉というワスプ社会に生きる自由なアメリカ人へとなりおおせるために是が非でも捨てねばならなかった彼自身の〈故郷〉がそのままのかたちでテキストの表面に噴出したものとするべきなのであり、つまり「他者」への責任の問題どころか、その「他者」への責任を遂行すべき〈アメリカ人〉の主体そのものの中で誰にも気づかれることなくすでに問題は深く進行している。
- 12 ギャッツビーとベンジャミン・フランクリンとの関係については Giles (180)、杉野を参照。フランクリン『自伝』における故郷や血縁の描写は極めてドライである。
- 13 私は、この小説の「前身」は“Absolution”というカトリック教徒の家庭における少年と父、教会の神父との交流を描いた短編であるとされていること（Brucoli 187-88）、また上記注9の Fessenden の提言などに鑑み、〈故郷〉においてギャッツビーは「事実」として父とともにカトリック教徒であって、ある時点でルター派に「改宗」しているのだが、それがテキスト上決して確認できないことにこそこの小説のカギがあると考えられる。
- 14 たとえばユダヤ人ギャングのウルフシェイムの存在をもっとも強く印象付ける言葉が「ゴネグション（＝つながり）」であることは、彼とその配下のギャングたち、あるいはギャッツビーとの関係がプロテスタンティズムの〈個人主義〉と対比されたユダヤ系の〈家族＝同胞〉主義のあらわれとして注目に値する。また、ミカエリスというギリシア正教徒と思しきギリシア系移民が苛烈なプロテスタンティズム的個人主義者の典型としてのジョージ・ウィルソンにかける言葉が「子供は作らなかつた？」「どこかの教会には属してはくちや、ジョージ。どくにこういうときにはね」「友達がいるのなら、電話して呼んでやるよ、ジョージ」などというものであることも、むろん示唆的である（149-52）。
- 15 ここでニックは厳密には「離婚」ではなく「家出」を勧めているのだが、その際に「離婚」をありうる可能性として想定していないとは考えにくい。
- 16 中野「預言者」参照。
- 17 デイジーがカトリック教徒であるということはテキストによっていったんほめかされ、そのちに注意深く否定されている（36）のだが、やはりここでも注9の Fessenden の〈カトリック性の隠蔽〉の主題を受ければ、デイジーがさらに反転して実は本当にカトリック教徒、あるいは誰か敬虔なカトリック教徒を血縁者を持つ人物であるかもしれない可能性は否定できない。ニックはデイジーの結婚式にも出なかつたほどの遠い縁戚関係（11, 21）なのであり、その意味では彼女の家のことに関しては実は確実な情報を持っていない可能性がある人間としてわざわざ設定されている、ということは間違いない。事実、彼は

小説冒頭でのブキャナン夫妻との再会に際して次のように言っている——「そういうわけで、僕はほとんど知らないと言ってよい二人の旧友〔トムとデージーのこど〕に会いに行くこととなったのだ」(12)。また第一章、座にいるものをひとりずつ「北歐人種」かどうか判断するトムがデージーのところで一瞬見せる「ごくわずかなためらい」はなんだろうか(18)。注9での Giles の言うようにこの時代がアメリカのカトリック教徒にとってアメリカ主流ワズブ文化との距離を微妙なかたちで保とうとしていた時代だったのだとすれば、また Fessenden が言うようにフィッツジェラルド家のような経済的に成功したアイリッシュ・カトリックの中産階級にとって当時カトリシズムは「新トマス主義」のもとでむしろアメリカン・ドリーム実現のための正道ようになっていたとすれば(186)、デージーの場合もそのようなことは十分に考えられる。たとえば鉄道王ジェイムズ・J・ヒル自身はプロテスタントだったが、彼の妻や十人の子供達はすべてはカトリックだった(Allen 20)。そういえばデージーの旧姓は「フェイ」であるが、Hanks によればこの名前は「イングランド系」であると同時に「アイリッシュ系」の名前でもある(557)。もしそれが事実であれば、この〈出自の抹消〉の主題のひとつの展開はフィッツジェラルド自身の人生における、あるいはギャツビーの人生におけるカトリック性の消去の主題と見事に響きあいつつ、実はこのあたりにこそその真の姿を垣間見せているとすることができよう。

## 引用文献

- Allen, John M. *Candles and Carnival Lights: The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald*. New York: New York UP, 1978. Print.
- Bewley, Marius. "Fitzgerald's Criticism of America." *Mizener* 125–41. Print.
- Bruccoli, Matthew. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Columbia: U of South Carolina P, 1981. Print.
- Callahan, John C. *The Illusion of a Nation: Myth and History in the Novels of F. Scott Fitzgerald*. Urbana: U of Illinois P, 1972. Print.
- Eble, Kenneth E. "The Great Gatsby and the Great American Novel." *New Essays on The Great Gatsby*. Ed. Matthew Bruccoli. New York: Cambridge UP, 1985. 79–100. Print.
- Fessenden, Tracy. *Culture and Redemption: Religion, the Secular, and American Literature*. Princeton: Princeton UP, 2007. Print.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Penguin, 1990. Print.
- . *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner's, 1994. Print.
- , and Max Perkins. *Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald-Perkins Correspondence*. Ed. John Kuehl and Jackson R. Bryer. New York: Scribner, 1971. Print.
- Fryer, Sarah Beebe. "Beneath the Mask: The Plight of daisy Buchanan." *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*. Ed. Scott Donaldson. Boston: G.K. Hall, 1984. 153–166. Print.
- Fussel, Edwin. "Fitzgerald's Brave New World." *Mizener* 43–56. Print.
- Giles, Paul. *American Catholic Arts and Fictions*. New York: Cambridge UP, 1992. Print.
- Graham, Sheilah. *The Real F. Scott Fitzgerald*. New York: Grosset, 1976. Print.
- Hanks, Patrick, ed. *Dictionary of American Family Names*. 3 vols. New York: Oxford UP,

2003. Print.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. (CSS). New York: Scribner, 1986. Print.
- . *Green Hills of Africa*. New York: Scribner 2003. Print.
- Le Vot, Andre. *F. Scott Fitzgerald: A Biography*. Trans. William Byron. New York: Doubleday, 1983. Print.
- Lehan, Richard. *The Great Gatsby: the Limits of Wonder*. New York: Twayne, 1995. Print.
- Meyers, Jeffrey. *Scott Fitzgerald: A Biography*. New York: Harper, 1994. Print.
- Michaels, Walter Ben. *Our America*. Durham: Duke UP, 1995. Print.
- Mizener, Arthur, ed. *F. Scott Fitzgerald: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice, 1963.
- Milford, Nancy. *Zelda*. New York: Haper, 1992. Print.
- Nowlin, Michael. *F. Scott Fitzgerald's Racial Angles and the Business of Literary Greatness*. New York: Palgrave, 2007. Print.
- Slater, Peter Gregg. "Ethnicity in the Great Gatsby." *Twenty Century Literature* 19 (1973): 53–62. Print.
- Tanner, Tonny. Introduction. *The Great Gatsby*. F. Scott Fitzgerald. New York: Penguin: 1990. Print.
- Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America and Two Essays on America*. Ed. Issac Kramnick. Trans. Gerald Bevan. New York: Penguin, 2003.
- Trilling, Lionel. "F. Scott Fitzgerald." Mizener 11–19. Print.
- Tredell, Nicholas. *Fitzgerald's The Great Gatsby*. New York: Continuum, 2007. Print.
- 麻田貞雄「モンロー宣言からトルーマン・ドクトリンへ——アメリカの外交とヨーロッパ観」『講座 アメリカの文化5 アメリカとヨーロッパ——離脱と回帰』佐伯彰一編，南雲堂，1970年，97-131頁。
- 上西哲雄「Nick Carrawayの物語——Wall Street と *The Great Gatsby*」『和光大学人文学部紀要』第27号（1992），1-15頁。
- ウェーバー，マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳，岩波文庫，2012年。
- 大木英夫『ピューリタン——近代化の精神構造』中公新書，1967年。
- グラーフ，F.W.『プロテスタンティズム——その歴史と現状』野崎卓道訳，教文館，2008年。
- 後藤和彦『迷走の果てのトム・ソーヤー——小説家マーク・トウェインの軌跡』松柏社，2000年。
- 齊藤眞『アメリカとは何か』平凡社ライブラリー，1995年。
- 佐伯彰一『文学的アメリカ——雑種社会の可能性』中公新書，1967年。
- 杉野健太郎「ギャツビー，アメリカ人になる——フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』はなぜグレートか」『カウンター・ナラティヴから語るアメリカ文学』伊藤詔子監，新田玲子編，音羽書房鶴見書店，2012年，147-163頁。
- 富永健一『近代化の理論——近代における西洋と東洋』講談社学術文庫，1996年。
- 中野学而「父の息子，息子の父——ヘミングウェイ，インディアン，アメリカの家族」『英米文学評論』第59巻，東京女子大学，2013年，1-44頁。
- 「預言者のペルソナ——『緋文字』におけるホーソーンの死と再生」『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス，大衆，文学史』平石貴樹，後藤和彦，諏訪部浩一編，松柏社，2013年，1-35頁。

- フランクリン, ベンジャミン『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳, 岩波文庫, 1957年.
- ブリュレ, イヴ『カトリシズムとは何か——キリスト教の歴史をとおして』加藤隆訳, 文庫クセジュ, 白水社, 2007年.
- ホーソーン, ナサニエル『ホーソーン短編小説集』坂下昇訳, 岩波文庫, 1993年.
- 宮本陽一郎『モダンの黄昏——帝国主義の改体とポストモダニズムの生成』研究社, 2002年.
- 武藤脩二「アイリッシュ・アメリカンの文学——オニールとフィッツジェラルドの「ブラック・アイリッシュ」」『ケルト復興』中央大学人文科学研究所編, 中央大学出版部, 2001年. 507-26頁.